

第7回生活、総合的な学習・探究の時間 WG 意見

2026.6.12 岐阜市教育長 水川 和彦

※公務により当日欠席のため、意見提出

今回配布資料「質の高い探究の実現に向けた社会との連携の推進等について」のP74の図【学校行事を通じた「好きや得意」の発表の機会の明確化（イメージ）】について少し気になる点がありましたので、意見を提出します。

「好きや得意」との出会いのきっかけにはじまり、芽生えた「好きや得意」を育てる可能性→「好きや得意」を花開かせる機会→咲き誇る可能性の一連の流れは、これでいいと思います。個々の発表等の機会を位置付けるイメージも素晴らしいと思います。

ただ、この図の【「好きや得意」との出会いのきっかけ】がすべて教科の学習から始まっているところに違和感を感じます。

もともと、子どもの好きとの出会いは、「教科学習」だけでなく「日常生活の中で出会う不思議や興味・関心」が発端になっている場合がほとんどです。お風呂で体が浮くのはなぜ？なぜ戦争はなくなるの？どうして夕方になると夕焼けが見えるの？…こういった子供たちの興味・関心は、教科の学習を待って湧き上がるものではありません。日常のちょっとした事実との出会いや不思議を重ねながら、その中でいつまでも心に残るものが、子どもにとっての探究の課題になると考えるべきです。実際SDGsにかかるような課題は、教科学習の学びと連動しているわけではなく、もともと持っている内的な課題意識が教科の学習を通して顕在化します。教師から押し付けられる課題より、子どもの内なる疑問の方が意味あると考えるのが妥当です。

前置きが長くなりました。検討いただきたいのは、【「好きや得意」との出会いのきっかけ】の下の方の青塗りの部分は、「各教科における探究的な学び」onlyとするのではなく、「日常生活や教科学習を通して出会う不思議や興味」といった文言にした方が自然です。「好きや得意」を伸ばし、それを花咲かせ、咲き誇らせるなら、スタートも出口も授業だけでなく子どもの日常生活（学校生活を含む）や未来へとつないでやるほうがよいと思います。

以上です。